

**講義録**

**インド農村議会の女性議員の子育てと仕事  
ーマイクロファイナンス、政治意識**

**北 川 将 之**

**Work-Life Balance of Panchayat Women Members in Rural India:  
Microfinance and Political Awareness**

**KITAGAWA Masayuki**

---

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 准教授

連絡先：北川将之 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科  
m-kitagawa@mail.kobe-c.ac.jp

## 女性学セミナー「インド農村議会の女性議員の子育てと仕事」

2015年6月12日(金)

神戸女学院大学 ジュリア・ダッドレー記念館104教室

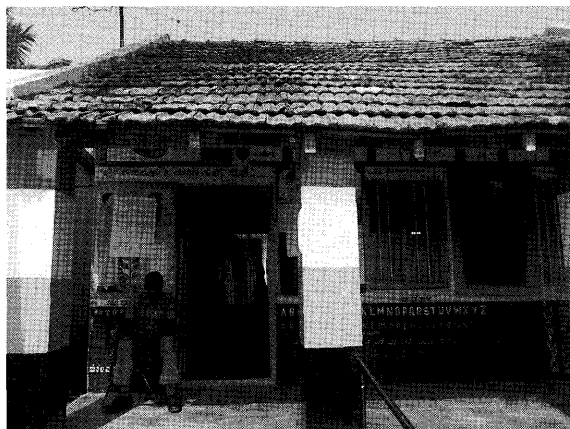
本学総合文化学科の北川将之です。私の専門はインド政治研究で、主に農村の村議員の活動に関心をもっています。本日は「インド農村議会の女性議員の子育てと仕事」というテーマで、幾つか事例を紹介したいと思います。

インドの政治には日本と大きく違う点が多くみられますが、そのうちの1つが女性の積極的な政治参加です。私が最初にインドへ行った頃（1990年代後半）には、既にインドでは村議会で女性が33%の議席を占めていました。全議員の3分の1が女性というのは、女性が政治において存在感を明確に示すことができる規模で、村議会を見学に行くと、女性がいるのは普通の光景でした。

最近の話をしますと、2015年5月下旬、私が調査を続けている村（インド・カルナータカ州ベンガルール農村）で5年に1度の選挙が実施されました。5月はインドでは年間で最も暑い時期です。デカン高原の比較的温暖な気候の村でも最高気温は36度で、交通インフラの乏しい農村の道を歩いているとかなり疲れます。村の人々は、少し涼しくなった夕方に投票所に向かっていました。投票所の様子を撮った写真をご覧ください。女性も数多く来ていました。交通が不便な農村では、地域の人々が十数人ほど集まって、一つのトラックに乗って投票所へ向かっていました。

インドは民主主義を重視する国で、選挙違反がないか厳しくチェックする体制が整えられています。黄土色の制服を着た政府の警備員がライフルも持って投票所を守っています。投票所の内部には選挙管理委員会のメンバーがいて、有権者登録簿を基にして、投票した人をチェックします。有権者は、段ボールの柵で仕切られた机で投票用紙に記入して、投票箱に入れます。ある村では、異なる政治勢力のグループが口論をしていましたが、そうした中で何名かに話を聞くことができました。

今回紹介するのは、2015年5月の村選挙に立候補した2名の女性の話です。



出所：筆者撮影

図1 投票所の様子

この2人は同じ村で同じ選挙を闘い合った間柄です。最初に紹介するのは、小学校の教師をしている26歳の女性Aさんです。この人のカースト（ヒンドゥー教の宗教上の地位）は「ダリット」です。カーストについて概観しますと、インドではカースト制度が長らく続いてきました。今でも（特に農村部で）カーストは強く意識されています。ヒンドゥー教徒の教えでは、生まれながら何らかの宗教上の身分を持って生まれてくると信じられています。カーストは、職業とも関係していて、バラモンであればこういう仕事につくというのが、世襲制で受け継がれています。その結果、カーストは所得に大きな影響を与えます。

さて、こういう特徴をもったものがカースト制度ですが、この仕組みの外に追いやられてきたのが、「ダリット」と呼ばれる人々です。かつては「アンタタッチャブル（不可触民）」と呼ばれ、触れることも、目を合わすことさえく汚らしい」と差別を受けてきた人々です。就ける職業は、過酷な肉体労働を強いられる畑仕事や、清掃、建設現場の労働者などです。その結果、いくら頑張っても所得は増えず、貧しい生活を強いられる場合が多いのです。先ほど

< Aさん >	< Bさん >
年齢：26歳	年齢：30歳
職業：公立小学校 教諭	職業：牛飼い
カースト：ダリット	カースト：ダリット
家族構成：	家族構成：
夫の両親、夫の妹	夫、
2歳の子	8歳の子
4歳の子	
立候補の理由：	立候補の理由：
夫（35歳、	村の知人、夫（村役場
携帯電話営業）の勧め	の公務員）の勧め
社会的活動：	社会的活動：
マイクロファイナンス	マイクロファイナンス

図2 今回の調査でインタビューした村選挙の立候補者の女性

の村選挙に立候補したAさんは、このダリットでした。

Aさんは比較的大きな家に住んでいます。部屋が3つぐらいある家で、家族の構成は夫の両親と夫の妹夫婦、そして2歳、4歳の2人の男の子がいて、言ってみれば昔ながらの大家族制で暮らしていました。

今回どうして村選挙に立候補したのかを聞くと、35歳になる夫の勧めだと答えてくれました。普段は何の仕事や活動をしているかを尋ねると、「マイクロファイナンス」と言っていました。もう活動を始めて4年目になるが、大変満足していると述べていました。マイクロファイナンスとは、従来銀行がお金を貸そうとしなかった貧困層に対して、10-20名程度のグループで連帯責任を負うことを条件に、少額の融資を行う活動のことです。インドでは国内の貧困層の約3分の1に当たる（人口1億人ぐらいの）貧困層が、マイクロファイナンスの恩恵を受けていると言われています。

マイクロファイナンスで借りたお金の使い道を決めるのは、貧困層自身です。20名前後のグループで話し合います。例えば、台風で被害を受けたメンバーの家を修復する費用として、これだけのお金を使いましょうという検討が行われます。このようにグループで定期的にお金の真剣な話し合いをするので、彼女達には社会的なコミュニケーション能力が求められます。

先ほど紹介した女性Aさんは、マイクロファイナンスの活動を4年間続けたので、村の女性たちと密な人間関係を持っています。選挙に立候補するときには、マイクロファイナンスで培った人的ネットワークに支えられた、つまり自分を支えてくれる友人がいることが後押しになったと語っていました。

Aさんの普段の生活についてですが、「子育てはどうなさっていますか」と聞くと、一緒に暮らしている夫の母親（52歳）が基本的には世話をしているそうです。日中、彼女は小学校に教えに行っているので、子育てには家族の支援が必要なようです。では、「御飯を作っているのは誰ですか」と聞くと、同居している夫の妹（26歳）だという返事でした。この女性は相当忙しいみたいで、マイクロファイナンスの会合に週1回出席しなければならず、また、教員として朝10時から午後4時まで小学校で仕事をした後、自宅でも一、二時間は学校関連の仕事をしなければならない。そんな毎日なので、食事を作る時間がないそうです。

では、忙しいなかで村議員の仕事ができるのか聞いてみたのですが、村議員は月に4回行われる会議に出席すればいいそうです。毎週1回の会議は、平日に行われると言っていました。勤めている小学校はどうするのかと聞くと、当選したら小学校は1年契約だからやめると言っていました。

村の議員は、月3,000ルピーの議員報酬を受け取ることができます。Aさんの小学校の給与は月5,500ルピーですから給料は下がります。しかし、現在の1年契約の教員よりも、5年任期の村議員の方がいいと話していました。

今回の選挙では、Aさんに強力なライバルの女性候補者がいました。二人が立候補して争った議席は、女性だけが立候補できる特殊なものです。それは女性の「留保護議席」と呼ばれています。村議会の定員（15名から20名ぐらい）のうち、50%の議席は女性しか立候補ができない仕組みになっています。更には、カースト別の留保護議席もあります。彼女たちが争った議席は、女性かつダリットでなければ立候補できないところでした。

Aさんへの聞き取り調査を通してわかったのは、ヒンドゥー教徒の女性が選挙に立候補することの難しさでした。選挙への立候補から投票まで、彼女の活

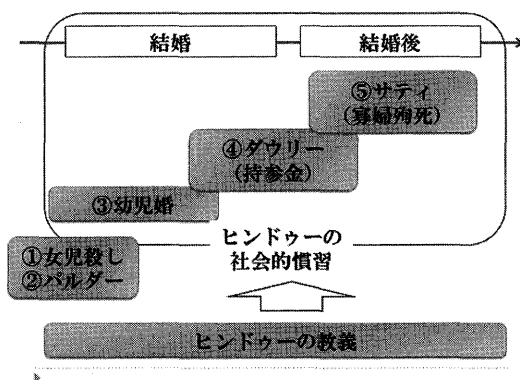
動を支えていたのは家族です。家族の協力なくして、外出して働くのは容易ではありません。また、夫の理解も大変重要であると思いました。

さて、もう一人の女性Bさん（30歳）の話に移りましょう。同じマイクロファイナンスのメンバーであっても、グループ内の女性達は必ずしも一枚岩ではありません。AさんとBさんは、2015年5月下旬に実施された村議会選挙で、互いに立候補を表明しました。マイクロファイナンスの関連で、毎週顔を合わせており、「サンガ・メンバー」としての仲間意識があるはずの女性達が、村の議会選挙では、敵と味方に分かれて議席を争うことになったのです。

Bさんは牛飼いの仕事をしています。カースト属性で言えば同じダリットに属しています。ただ彼女の家族構成を見ると、核家族です。この点はAさんと異なります。部屋が2つの非常に狭い家屋で、夫と8歳の男の子の3人で暮らしています。ただし、彼女の両親は同じ村の近所に住んでいます。若い世代の間では、1つの世帯で1つの家を持つのが最近よくみられるパターンだそうです。なお、最初に紹介した大家族の女性Aさんは、夫の両親、夫の妹夫婦、そして彼女の夫婦が、一つの家で暮らしていましたが、来年には「妹夫婦は近所に新しく家を建てて実家から出てゆく」と言っていました。伝統的な大家族制から核家族へと徐々に変化しつつある様子がうかがえます。

さて、Bさんの話に戻りますと、彼女はマイクロファイナンスを3年間続けています。朝9時から夕方まで牛の世話をするため外出するので、子育ては子供が小さい時期から同じ村に住む母親にお願いしていたそうです。村の議員になったら仕事はどうしますかと聞くと、仕事をしないと食べていけないので、牛飼いの仕事も続けるそうです。週1回議会に行く時は、仕事の代理を母親にお願いすると言っていました。

Bさんに「同じマイクロファイナンスのグループから同じ選挙区にどうして二人も立候補したのか」と尋ねたら、二人は事前に話し合いをして、候補者を一本化しようとしたらしいです。しかし、それを許さなかったのは、二人の夫達だったようです。Aさんの夫とBさんの夫（村の役人）は互いに譲らず、候補者調整の話し合いは決裂してしまいました。それゆえ、村選挙でマイクロ



出所：筆者作成

図3 ヒンドゥー教の慣習と女性

ファイナンスの二人の女性は、それぞれの夫の「代理戦争」を強いられることになったのです。

今回の村選挙の調査では、村の女性達が男性の政治的対立に巻き込まれるケースが考察されました。しかし、村の女性達が直面している困難な問題は他にもあります。それはヒンドゥー教の伝統的慣習です。ヒンドゥー教徒の女性は、女性であるという理由で、子育てや仕事の面で厳しい試練や不利益をこうむる状況にあります。では、図を使いながら具体例を紹介したいと思います。ある女性が一生のうちに直面するヒンドゥーの慣習を、図の①から⑤に整理しました。

第一に、「女兒殺し」と呼ばれている問題です。これは、妊娠時の性別判定検査で、お腹の子供が女の子だとわかったら中絶してしまうことを指します。女兒の中絶は、生まれる前に命を絶たれるという意味で「女兒殺し」と表現されるのです。なぜ女の子が生まれてくるのが忌避されるのかと言えば、それはヒンドゥー社会の慣習である結婚持参金（ダウリー）が大きく影響しています。結婚するとき女性の側が男性にお金を持っていく習慣を、「ダウリー」と呼んでいます。生まれてくるのが女の子の場合、親はダウリーのお金を貯める必要

があります。そうした金銭的な負担を嫌がって、女兒よりも男児を望む傾向が強まっています。

インドの6歳以下の人口の男女比（2011年センサス統計）をみると男子1に対して女子は0.9となっています。明らかに男子の数が多いという状況は、女兒殺しが行われていることを示しています。先ほど紹介した村選挙に立候補した女性の場合も、子供はいずれも男の子でした。このまま男女の人口格差が拡大してゆくと、インドの男性は結婚相手の女性を探すのが難しくなる等、深刻な社会問題に発展するのではないかと懸念されています。

子育てに関して言えば、男の子と女の子とは、子育ての方針が全く違います。男の子は自由に外で遊ばせますが、女の子は「パルダー」（図の局面②）という習慣が今でも農村では根づいています。パルダーは南アジア地域に広くみられる女性隔離の一種で、小さな女の子は家の中で遊び、外にあまり出歩くべきではない、という考え方や慣習のことです。

次に紹介するのは、「幼児婚」（図の局面③）の習慣です。例えば、最近電車の車内広告で「私は13歳、まだ恋をしていないけど結婚している」という内容が書かれた幼児婚防止の啓もう活動のポスターを目にすることがあります。以前、インドの農村では10-15歳の女の子が結婚することは、ごく普通の出来事でした。今でも一部でそうした習慣が残っています。今回の調査でインタビューしたある女性は、「私は今30歳です」と言いました。「結婚したのはいつですか」と聞くと、「15年前です」と答えました。15年前ということは、結婚したのは15歳の時だったと気づいて、質問をする私も質問に答える女性も、思わず苦笑いしたことがありました。女子の最低婚姻年齢は18歳です。これはインドでは誰もが知っています。しかし、幼児婚の多くの場合、役所の書類を適当にごまかして結婚するのです。

さて、女の子の子育てで、親の一番の悩みは結婚への準備です。2015年5月最終週の木曜日は、インドのホロスコープ（星占い）によると、結婚に適した日でした。ヒンドゥー教徒は占いが好きで、結婚式などのお祝いの日にはホロスコープで決めることが多いそうです。その日は、夕方になると各地のヒン



ドゥーの寺院で結婚式が行われていました。

私がフィールド調査で何度もお世話になっている研究所の女性スタッフが「娘が結婚するので来てほしい」と招待してくれたので、見に行きました。夕暮れどき、南インド独特の形をしたヒンドゥーの寺院の中は、祭壇が華やかな花で彩られていました。沢山の席が用意されていて、奥の部屋では装飾できれいに正装した花嫁が座って待っていました。

男性は何をしているのかというと、友人達と車に乗って寺院の周りをゆっくり練り歩いていました。「俺は結婚するぞ」という感じでした。そして、一通り村を回ってから、彼女を迎えに行くという、こんなストーリー仕立ての結婚式の演出が行われていました。インドの結婚式は、平均2日間か3日間かけて行います。何をやっているのかというと、寺院の中の大広間で、楽器の演奏のバンドを呼んで歌を歌ったり、寺院の隣の食堂で無料の食事が振る舞われます。食事代、音楽演奏のバンドを呼ぶ費用、あるいは、結婚用のドレスの費用などをあわせると膨大な額になります。

こうした結婚費用は、親が準備する結婚準備金（ダウリー）で賄われます。ただし、それは花嫁の家族が捻出しないといけないため、女性側の家族にかなり金銭的に負担させる慣習があるわけです。もしダウリーの額が少ないと、結婚式自体も寂しいものになりますし、結婚後の生活にも悪影響が及びます。ダウリーの額に不満があると、女性は夫側の家族から嫌がらせを受けます。女性のなかには、いじめに耐えかねて実家に戻るケースも決して珍しくはありません。それゆえ、ヒンドゥー教徒の親たちは、ダウリーに関してはかなり神経をとがらせています。

ダウリーの額の相場は、年収の数倍とされています。例えば日本で平均年収400万円だとすれば、その数倍（1,000-2,000万円近く）を要求されるという感覚です。これは相当な額です。子供が女の子1人だったらまだ何とか工面できるかもしれませんが、インドの家庭の子供の数は平均2-4人です。そうすると女の子の子供が2人、3人の場合もあるわけで、そうなるとダウリーを十分に準備するのは困難になります。それゆえ、先にのべたようにインドでは女の

子の出生が忌避される傾向にあるのです。

子育てと子供の結婚が終わった後も、ヒンドゥー教徒の女性には、困難な局面が待ち構えています。女性は比較的若くして結婚します。結婚相手の男性は年齢が上です。インタビューで調査した女性達の場合でも、30歳の女性は45歳の男性、26歳の女性は35歳の男性と結婚していました。伝統的なヒンドゥー社会では、10歳ぐらい年齢が離れているのが適切であると考えられています。こうした年齢差の背景には、男性が女性を「支配」したいという考えがあるのかもしれませんが。これだけの年齢差があるわけですから、結婚しても夫のほうが社会経験や知識があり、発言力が強くなります。

また、年老いてくると、先に亡くなるのは男性が圧倒的に多くなります。未亡人となった女性は、自分の子供の家族と共に暮らすことになりますが、そこでは満足に食事も与えられない等、ひどい扱いを受けることがあると聞きます。極端な例では、「サティー」という伝統がかつてヒンドゥー社会にありました。今では法律上厳しく罰せられることになったので殆ど行われなくなりましたが、20世紀初頭、インドを植民地支配していたイギリス人が最も驚いた非人道的なヒンドゥーの習慣が、サティーでした。

サティーとは、亡くなった夫の遺体が焼かれている火のなかに、未亡人となった女性が飛び込んで、自らも命を絶つという伝統的習慣のことです。夫婦ともに命を全うするという行為は、ヒンドゥー女性にとって最も「尊い」死であるとみなされた時期があったそうです。この習慣は、「寡婦殉死」とも呼ばれました。

1947年のインド独立後になると、サティーは殆ど行われなくなりました。しかし、1987年、インド東部のラージャスターン州のある村でサティーが行われ、それを聞いた地域の人々が彼女の死を尊いものであるとして、群衆が彼女の肖像を掲げて各地を行進して称賛するという事件が起こりました。それに驚いたのがインド政府です。サティーは非人道的な行為であるとして禁止する法律を制定していましたが、事態を重く見た政府はその罰則を厳しく強化するなどの対応に迫られました。この時に改めて制定されたのが、1987年サティー禁止法

です。

サティーのような伝統的慣習は、ヒンドゥー社会がいかに男尊女卑であるかを象徴するものでした。現在でも未亡人となったヒンドゥーの女性は、不吉な存在と思われる傾向があります。社会に出て働こうとしても、未亡人であることを理由に差別されたり、家の中でも満足に食事を与えられず、栄養失調状態に追いやられるケースが後を絶たないそうです。

この女性学インスティテュートの連続セミナーでは、インドのヒンドゥーの女性に焦点をあてて、彼女達が子育て、結婚、仕事をしようとすると、様々な困難な状況があることを紹介しました。地理的に遠く離れたインドの話なので、あまり馴染みのない内容で分かりにくい点多々あったかと思いますが、日本の女性を取り巻く環境を考える一助になれば幸いです。